

「ポスト社会主義の政治経済学」を読んで



盛田常夫著「ポスト社会主義の政治経済学」

森岡 裕(富山大経済学部教授)

本書の著者、盛田常夫氏は高岡市生まれの経済学者で、ハンガリーを中心に経済体制研究を専門としている。現在は、立山科学グループ・ハンガリー立山研究所の社長を務めている。本書はハンガリーを対象として、中・東欧におけるポスト社会主義のモデルを分析したものである。ベルリンの壁が崩壊し

た後、体制が転換するなかで、変化していくものと旧制度から継続するものが併存してきた。著者はそんな状況を見つめ、体制転換後の社会を深く考察している。

20世紀に存在した社会主義と

体制転換後の社会考察

経済を、「借り物経済」と「ゲス・トワーカー」現象という用語で規定した。前者の意味は、進出してきた外資にハンガリーの経済や経営の管理をまかせ、自分たち（政府指導者やエリート）は報酬だけを受け取るという状況のことである。後者は、社会主義時代の労働者保護施策と法

反社会主義・反共産主義を党是としていても、資本主義的な施策によって切り捨てられる層を擁護するために社会的な施策を支持し、政権党を批判する。つまり「左翼が右翼の政策を実行し」「右翼が左翼の政策を擁護する」というねじれ現象が頻繁に起こるといふのだ。また、

は、いったい何であったのか。著者は重要な問題設定を行い、単純に「計画経済」という用語では済ませられないという見解を示す。経済を計画・制御するという困難な課題は、人間（政権にある団体）が容易に行えることではないと指摘するのだ。そして転換後のハンガリー経

が継続するなかで、優雅な労働を満喫する状況という。政治については、「左翼」右翼」という区分の無意味さを指摘した。政権担当政党は現実の問題に対処するため、たとえ社会主義的な党名を掲げていたとしても、資本主義的な施策を実行せざるを得ない。他方野党は、

トップにいた一部の人を除いて多くの旧エリート層が、体制転換後の社会でも権力者の地位にとどまっていることが珍しくないことも明らかにしている。補遺ではハンガリー社会（偉人）について紹介している。日本ではあまり知られていないが、ハンガリーは自然科学を中

心に多くの天才を生んできた国である。この点について興味を持たれた読者は、盛田氏が翻訳された「異星人伝説」20世紀を創ったハンガリー人（マルクス・ジョルジュ著、日本評論社）を併せて読まれることをお勧めする。なお、同書の訳者まえがきによると、盛田氏が社長を務めているハンガリー立山研究所は、「日本の応用工業力とハンガリーの理論的基礎力の結合を目的として設立されたもの」ということだ。

内容的に幅広く専門性の高い著作であるが、読みやすい本でもあるので多くの人がこの著作を読まれることを期待する。

◇ 「ポスト社会主義の政治経済学」（日本評論社）はA5判218頁、3990円。